

おだわら
情報

生誕160年、益田鈍翁の記憶

Do You Know 鈍翁? ②

郷土文化館では今秋、益田鈍翁の生誕160年を記念して、松永記念館で特別展を開きます。ここでは、鈍翁の人物像と、鈍翁から始まった小田原の近代茶道の歩みをシリーズで紹介します。

郷土文化館 ☎ 231377

『三井王国の大番頭』と言われた鈍翁。社長を務めた三井物産は広く海外に躍進し、明治後期には、支店・出張所を東洋に30か所、欧米に10か所ほど有していました。

鈍翁は、目覚ましい海外進出の中で、外国人が日本の美術品を大量に買っていく姿を目の当たりにします。近代化・欧米化の大きな波が押し寄せ、国内では西洋文化を崇拜し、伝統的な日本文化を軽んじる風潮が生じ、さまざまな古美術品が安い値段で流出していきました。

「日本の美術を発展させるには、それらを日本国内で大切に保存し、研究しなければならぬ」

鈍翁の古美術収集が始まりました。中でも、茶道具の収集には熱心で、雅号の『鈍翁』は茶器『鈍太郎』に由来するものでした。

やがて、鈍翁は、輝かしい業績を残した実業界からの引退を考えます。自分の健康を考えて、「海三分山七分のところが良い」と土地を求めていたところ、友人の神原富文（元小



田原藩士)や、すでに小田原に別荘を構えていた内務大臣・野村靖に勧められ、1906(明治39)年に板橋に土地を購入し、1914(大正3)年に移り住みました。

約2万5千坪という広大な屋敷地は、鈍翁によって『早雲台(のちに掃雲台)』と名付けられ、91歳で亡くなるまで、ここで、茶の湯さんまの日々を過ごしていました。

鈍翁ゆかりの品や情報をお持ちのかたがいらっしゃいましたら、ぜひ郷土文化館までご連絡ください。